

松原 茂樹

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 非常勤講義員

民家を活用した介護サービスに関する研究

近年、通所介護では民家を活用することが増えている。また 2006 年 4 月からの介護保険の改正により、小規模多機能型居宅介護が制度化され、今後民家活用の増加が予想される。本研究では、未だ曖昧としている民家を活用することの意義と地域密着の地域の範囲を明らかにすることを目的とする。

調査対象施設は、A 町にある H-a デイサービス(H-a デイ)である。H-a デイは、利用対象施設を 3 地域に限定し、築 100 年以上の農家を譲り受け、部分的な改修を経て 2004 年 12 月に開設した。調査方法は、H-a デイにおける行動観察調査、利用者の自宅への訪問調査、関係者へのヒアリング調査、介護日誌の収集である。行動観察調査は利用者・職員の滞在場所・行為内容・会話内容を 9 日間記録した。自宅への訪問調査では、自宅平面の記録や生活歴・過ごし方について利用者・家族にヒアリングを行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1)元の持ち主とその場所に関する記憶が利用者・職員・集落住民に共有されていること
- (2)元の持ち主が築き上げた集落住民などとの社会的関係を引き継ぎ、その財産が生かされていること
- (3)伝統的な農家の暮らしである日中を「ガイドコロ」と呼ばれる場所で過ごすことが継承され、それを引き継いだ機能訓練室で利用者は日中のほとんどを過ごすことなど、伝統的な農家の間取りによる住まいの方の規範が継承されていること
- (4)伝統的な農家にみられる主人を長とする座席位置のヒエラルキーについても一部の利用者に継承され、その規範が引き継がれていること
- (5)伝統的な農家にみられる「ドマ」と「ガイドコロ」の境界にある段差の使い方について、一部の利用者にその使い方が継承されているだけでなく、機能訓練の場所として新たな意味づけがなされていること